

最初に花子さんの足あとを発見したのは2年B組の生徒だ。
「いわゆるパリピ。夏の思い出作りをかねて、旧校舎に肝
試しに行ったの」

いちご牛乳のパックにストローを突き刺し、ずごと吸い
上げる。

「サラちゃんウチの花子さんの話知ってる？ 旧校舎3階女
子トイレ、右から3番目に出るアレ。何十年も前にいじめ
を苦にしてトイレの個室で首吊った生徒って話だけどね……
てかなんでトイレで首吊るのかな、最後を締めくくるなら
もつといいトコあるだろに。便所飯の名残り？」

「前置き長いっすね、ちやつちやつと進めてください」

辛口でダメだしするのは、上履きであぐらをかき、やきそ
ばパンを頬張るギヤル。

「了解。えーと、どこまで行つたっけ」

「便所飯まで」

「そーそー便所飯。で、肝試しの最中に見ちやつたの」

「何を」

「花子さんの足あと」

昼休みの屋上には彼女たちの他に誰もいない。

いちご牛乳を合間合間に吸い上げて、饒舌トクで捲し立
てた繭がまともに入る。

「旧校舎3階の廊下を歩いてたらツルつと滑って、なんだ

ろつて見下ろしたら床が濡れてる。よく見たら上履きの足
跡。ぶつちやけみんなびびってたけど、確かめないうで帰っ
ちやつたらもつと怖いし、仲間内で見栄張り合つておっか
なびつくりびちよ濡れの足跡辿つたの。したら」

「女子トイレに続いてたんすか」

「冴えてるねサラちゃん」

「冴えてねーしちんちんいうなし」

「下ネタ？」

「じゃねーよ、そのフリで逆に体育館とか続いてたらびつ
くりだよ」

サラは繭よりメイクが濃く、顔立ちも派手に整っている。

繭が小動物ならこちらは猫科の肉食獣か、ラメが散りばめ
られた青いネイルを目の位置にかざして眩く。

「で？ おしまいっすか」

「どっこい、ここからがミステリー」

繭が真剣な面持ちで身を乗り出す。

本人は精一杯雰囲気を出そうとしているが、いかんせん下
ぶくれの童顔のせいで迫力に欠ける。

「花子さんの足あとはななななんと！ 旧校舎3階トイレ、

右から2番目で消えてたの！」

「花子さんは3番目に出るんじゃないんすか」

「だからミステリーって言つたじゃん、ちゃんと聞いてて

よ」

ぶん殴りたい。

口の減らない先輩をひと睨み、いらだつて腕を組む。

「なんで右から3番目にでるはずが2番で消えるんすか、おかしいでしょ。そもそも花子さんて地縛霊じゃないんすか？ 夜の学校ふわふわしてたら浮遊霊じゃん、もつとガチでアイデンティティーにこだわってほしつす」

「寂しくなつて出てきたんじゃない？ 死ぬ前はいじめられたっ子だったって話だし、大勢でワイワイしてるの見て友達欲しくなつたとか」

「いじめを苦にして死んだんならウエーイ勢は避けるつしよ」

「もつとも」

反論できず首を竦める繭。

サラは人さし指で小刻みに反対の腕を叩き、疑問点を洗い出す。

「アタシも花子さんの噂なら知ってます。旧校舎3階女子トイレ、右から3番目をノックして呼びかけると中に引きずり込まれる。顔を上げるとそこには首吊つた女生徒がいて、こつちを見下ろして笑うとか啜り泣くとかなんとか。まーよくある学校七不思議つすよね、繭センは信じてんすか」

馬鹿にしきつた口調で挑発すれば、繭が俯いて頬を膨らま

す。

「だつて見たんだもん、足あと」

子供っぽく拗ね、「2ーB 藤田繭」と油性サインペンで書かれた上履きでタイルを蹴る。

「どうしたいんすか繭センは」

「確かめにいこ」

「出たよ」

繭は好奇心のかたまりだ。

その上怖い話が大好きときて、しばしばサラを肝試しに連れ出そうとする。

「だつて気になんない？ なんで花子さんが右から3番目じゃなく2番目の個室に消えたのか」

「帰るトイレ間違えたんでしょ。解散」

「寝ぼけて踊り場でおしっこやらかしても帰るトイレ間違えんのはありえない」

「いやそつちのがないつしよ、ドン引き……」

「5歳の時なんで時効」

「実体験すか、ますます引いたわ」

繭が紙バックを握り潰し、目を輝かせて宣言する。

「きまり！ 今日之夜9時旧校舎に集合！ 花子さんの足あとの謎を二人で突き止めて、校内新聞にでつかく載るよ」

「目標が小さいんだか大きいんだかわかんねつす」

「いいじゃん、ひと夏の思い出作りつてヤツだよサラちゃん。それとも先約アリ？ 彼氏？ だったら真つ先に教えてつて言つたでしょ」

「あくもくわかりましたつて、繭センに付き合つて心霊ツアーすりゃいいんですよ」
なげやりにOKするサラ。

繭は一度言い出したら聞かないヤツだ。昔からそうだった。けどサラは、実の所繭が嫌いじゃない。

鈍くてズレてて天然でイライラすることもあるけれど、口が悪くて同級生に敬遠されがちな自分の世話を焼いてくれる親切心には信頼おいていたし、彼女と2人でだべりながら屋上でお昼を食べる時間に癒されていた。

金網が張り巡らされた屋上で寄り添い、飛行機雲が直線で伸びる青空を見上げる。

繭が好きで突き放せないからこそ、サラは文句たらたらこの人に振り回されるはめになるのだ。

繭とは旧校舎の前で待ち合わせた。

「サラちゃん、こつちー」

「手えぶん回さなくても見えてるつすよ」

「警備員さんにばれなかった？」

「プール裏の金網一か所破れてるんす、そこ抜けてきまし

た」

「灯台もと暗しだね」

「用法間違つてるし」

「え、ちがうの？」

「肝心なことは意外と自分の近くにあつてわかりにくいって意味つすよ」

「大体同じじゃん、おまけしてよ」

などと馬鹿話をしながら、夜が更けて不気味さが増した旧校舎へ歩いていく。

サラはキヤミソールとホットパンツに着替えているが繭は制服のままだ。

「繭セン、調子は」

「いいよー。前はよくぶつ倒れてたけど、最近は絶好調」

「ならよかった」

「心配してくれたの？ やさしいねサラちゃん」

繭がサラを覗き込んで頭をなでるまねをする。子ども扱いされるのは苦手だ。サラはよそよそしく咳払いし、友人や先輩、ネットをあたつて集めた情報を述べる。

「待ち合わせまで時間があつたからアタシなりに調べてみたんす、ウチの花子さんのこと。ネットでも一部じゃ有名みたいっすね、30年位前から噂が回り出したとか」

「花子つて子はホントにいたの？」

「名前がちがうけど、同じ頃に死んだ生徒なら」
(以下続)